

おほつのみこ 大津皇子の薨せし後に、おほくのひめみこ 大伯皇女、伊勢の
いづきのみや 齋宮より京に上る時に作らす歌二首

一六三番

かむかせ 神風の
いせ 伊勢の国にも
あらしを あらましを
なにしか来 けむ 君もあらなくに

一六四番

み 見まく欲り
あ 我がする君も
あらなくに なにし
か来 けむ 馬疲らしに

おほつのみこ 大津皇子の屍を葛城の二上山に移し葬る時
おほくのひめみこ 大伯皇女の哀しび傷みて作らす歌二首
に、

一六五番

いと 人なる我や
あす 明日よりは
ふたがみやま 二上山を
いろせ 弟と我が見む

一六六番

いそ 磯の上に
お 生ふるあしびを
たを 手折らめど
み 見すべ
き君が ありといはなくに